

つるおか新図書館基本構想企画懇話会 第2回議事概要

1 会議概要

- (1) 日 時：令和6年11月20日（水）午後6時～午後8時15分
- (2) 場 所：鶴岡市立図書館 講座室
- (3) 出席者：略

2 会議次第

- (1) 開 会
- (2) あいさつ 市長、教育長
- (3) 議 題
 - ①現状と課題の整理
市民からの意見徴収（中間報告）
 - ②基本理念、基本方針について
- (4) コメント
- (5) 閉会

3 発言要旨

（副市長）前回の懇話会では「本市の図書館を大事にするべきこと」について参加者からご意見をいただいたが、これらの意見を基に今回は3つのテーマを設定する。

1つ目は「居場所」、2つ目は「学びと繋がり」、3つ目は「地域を知る、発信する」というテーマとする。また、図書館ミーティングやデジタルプラットフォーム、対象別のヒアリングやアンケートを通じて集めた意見を総合的に検討した結果、このテーマ設定が有効であると考えている。

今回の懇話会では、この3つのテーマをもとに議論を進め、図書館の基本構想における理念や方針を深めたいと考えている。

（図書館長）〈説明〉現状と課題ほか

○基本構想の構成案

○現在の図書館の現状と課題

本館の現状の課題として、多様なニーズに対応できていないこと、全体的なスペース不足、施設の老朽化、駐車場の不足が挙げられる。立地も課題の一つで、大通りから奥まった場所に位置しており、図書館利用目的以外の来館者が少ない。前回の懇話会で観光客も訪れる図書館にしたいという意見が出たが、現在の場所では市街地を訪れる人々の回遊ルートには含まれにくい状況である。現状分析から浮かび上がった課題として、滞在空間の不足、市民の多様な学習ニーズに応える資料提供の不足、市民が本や資料に触れる機会の少なさが挙げられる。ただし、図書館は本や資料を提供するだけでなく、それを通じて新たな出会いや交流の場を生み出す可能性を持つ施設であるとも考えている。

（副市長）図書館長から鶴岡市の図書館の現状について客観的なデータが示された。そこで、図書館の評価について他に重視しているポイントがあれば、山崎先生からご発言いただきたい。

（山崎アドバイザー）現在行われている図書館の評価は、定量的な評価が重要だが、質的な評価も重要だ。日本では定期的に事例評価が行われ、例えばレファレンスサービスやターゲットサービス、ボランティア活動など、数値では表せない部分が評価されている。また、図書館が地域文化と連携し、市民との協働で運営される事例が注目されている。小布施町立図書館や多治見市立図書館など、地域資源を活かした運営が評価されている。今後の図書館運営には、単に数値的な成果を追求するだけでなく、地域貢献や市民のニーズに応じた質的な評価が重要であり、行政もその視点を持つことが重要だ。

(副市長) お話を聞いて、評価された図書館にはそれぞれ特徴があり、情報発信に力を入れている図書館が多いことを改めて実感した。鶴岡市の図書館は静かな環境という特徴があるが、地域性や特色を活かし、積極的に情報発信を行っていくことも重要ではないか。それでは次に、月に開催された懇話会、また11月までに実施された市民の声を聞く機会について、事務局から報告をお願いする。

(図書館長) 〈報告〉市民からの意見聴取(中間報告)

- 第1回企画懇話会
- 全3回図書館ミーティング
- デジタルプラットフォーム
- 分館での意見交換
- 市民アンケート

(山崎アドバイザー) 鶴岡市には何度か仕事に関わり、観光でも訪れたが、文化性の高さに驚いている。東北でも鶴岡市の文化性は圧倒的で、市民が地域文化を大切にしており、文化性が重要視されている。また、ワークショップでは「地域文化」や「学び」といったキーワードが共通して取り上げられ、市民の文化に対する理解や意識が高いことが分かった。他の地域では重視されないこともあるが、鶴岡では高いレベルで議論が進んでいると感じた。一方で、「図書館に関心がない人」へのアプローチが十分でない点が課題として挙げられ、特にアンケートで見られた「本は書店で買う」「ネットで十分だ」という意見は、図書館の役割に対する誤解や認識不足から来ていると感じた。今後、図書館の必要性を市民にもっと伝える努力が必要だと改めて感じている。

(副市長) 先生からのコメントをお聞きし、この地域が「学び」を大切にしてきたことが再確認でき、市民の意識が非常に高いことを実感した。また、トレンドをうまく捉えた意見が多く、非常に充実した内容だったと思う。それでは、これから協議に入らせていただく。先ほどご説明した通り、「居場所」「学びとつながり」「地域を知る・発信する」の3つのテーマに分けて行う。最初のテーマ「居場所」について、皆様からのご意見をお願いしたい。

(委員) 私はかつて図書館に子供を連れて行くのが大変だった。しかし、今は子供たちも図書館に来るのを楽しみにしており、10冊まで本を借りて一生懸命選んでいる。その様子を見て嬉しくなり、気持ちが変わったことを実感した。以前、図書館はどこか気を使う場所だったが、今は親子連れにも優しく、良い雰囲気を作られていると感じている。また、図書館にいろんな世代の人々が集まるようになり、時間帯によって異なる年齢層が訪れるようだ。そのため、時間帯ごとの利用者層を調査し、それに応じたサービスや雰囲気作りを行うことができると思う。例えば、福井県の越前にある資料館で見たように、来館者が自分で入館カードを入れる仕組みを使えば、どの時間帯にどんな人が来ているかを把握でき、より柔軟な図書館の運営ができるのではないかと感じた。

(委員) 最近シニアの友人が「やる気を求められる場所ばかりで、行きづらい」と言っていた。鶴岡市内にはゆるく入れる場所が少ないということだ。例えばカフェや、お金を払わなければいけない場所が多く、気軽に入れる場所が不足しているというのが問題だと感じている。金銭を伴わない楽しみ方もあるはずだが、図書館に関しても、風が抜けるような「ゆるい」場所があってもいいのではないかなと思う。全力で新しいものを作ることも大切だが、時にはゆったりとした空間があってもいいのではないかな。

(委員) 学校に勤務していた際、目的もなく図書館に立ち寄ることを好ましく思わないという声を聞くことがあったが、私はそのような「ふらっと来た子ども」が大事だと思っている。何も目的がないけれど、ただ居心地が良くて図書館に来るというのも、非常に価値のあることだと思う。例えば、図書館で何気なく声をかけられ、勧められた本を手にとることで素晴らしい出会いが生まれること

もある。目的がなくても、図書館には新しい発見や出会いがある可能性があり、そういった「ゆるい空間」は非常に重要だと感じている。そうした空間を作ることで、市民の方々が自然に立ち寄りやすく、また予期しない良い経験ができる場が提供できるのではないか。個室のような静かな場所や、庭のような開放的な場所があれば、さらに多様な人々が集まることができると思う。

(委員) 私が図書館にあったらいいなと思う空間は、子ども向けの図書館で半個室的なスペースや、1人または2人が少しお膝を曲げるくらいのスペースがあれば、本を読んだり、リラックスできたりする場所として適していると思う。実際に子ども向けの図書館でそのような空間を見たことがあり、大人でもそのような空間に入ると、安心感があり、ちょっとしたワクワク感を覚えることができた。そんな小さなスペースが複数あると、居心地が良く、利用者にとっても心地よい空間になるのではないか。

(委員) 最近、不登校の子供たちが増えているという記事を読んで、学校に行けない子どもたちがどのように過ごしているのかが気になった。図書館は、学校に行けなくても行ける場所であり、リラックスしたり学んだりできるスペースとして、子どもたちにとって大切な居場所になると思う。例えば、図書館に一人で学んだり、リラックスできる場所があれば、子どもたちは安心して過ごせるだろう。また、食事を取る場所があれば、弁当を持参して勉強したり、疑問点を司書に聞いたりすることができ、より居心地の良い環境が作れるだろう。さらに、親と司書がコミュニケーションを取れる場を設ければ、親が安心して子どもを預けられるような環境が整い、子どもたちにとってもより良い居場所ができると思う。

(委員) 鶴岡市でも不登校の子どもが増えていることは確かである。特に親が働いていると、子どもを1人で家に置いておくことが不安だという声がよく聞かれる。子どもが居心地よく過ごせる場所があれば、親も安心でき新たなきっかけやステップが生まれるかもしれない。自身の経験から、地域の支援や温かい公共の場所で、子どもたちが安心して過ごせる場が増えれば、親としても助かるし、子どもたちにも良い影響を与えると思う。また、子育て中に図書館に対して「怒られる場所」という印象を持っていた。しかし、今ではそのイメージも変わり、図書館がより開かれた場所になったと感じている。以前市内にあった家庭文庫では親として励まされることが多かった。あのよう、そっと寄り添ってくれる存在が図書館にもあればさらに多くの人々が支え合いながら成長できる場所になると思う。

(委員) 私の子どもの頃の図書館の思い出として、紙芝居を読んでもらったことがある。その思い出が今でも残っている理由を考えると、靴を脱いでリラックスできるような空間で過ごしたからだと思う。家のようにくつろげると、自分の居場所として感じられ、リラックスできるからこそ、良い思い出として残っているのではないかと感じている。また、私は時々「本音を話す会」というイベントを開催しているが、その時に畳のスペースで靴を脱いでくつろげる空間を作ると、参加者が本音を話しやすくなることが多い。やはり、体がリラックスできる空間は、心もリラックスさせ、より自然な対話を生むのだと思う。そういった空間作りは、居場所として非常に重要だと感じている。

(委員) 最近の災害時に避難場所が設置されることがよくあるが、図書館はそのような避難場所としての機能を現在持っているのか伺いたい。また、震災時には、阿部委員と一緒に被災地に本を送るボランティアをしたことがあり、その際絵本や雑誌、漫画など、さまざまなジャンルの本が、それぞれの状況に応じて役立つということに気づいた。こういった機能も図書館にはあるのか、という点についてもお聞きしたい。

(図書館長) 避難場所としての位置づけについて確認必要だが、現在、隣のかたばみ保育園の子どもたちが、毎年避難訓練で図書館の2階に避難するという取り組みが行われている。そのため、特に水害時などには、図書館は安全な場所として位置付けられていると考えている。また、災害時に

おける本の役割についてだが、東日本大震災の際には、本を集めて被災地の気仙沼に送ったという実績がある。その時は、貸出ではなく、寄贈の形で本を提供したと当時の職員に聞いている。

(※事務局にて図書館は指定避難所にはなっていないことを確認。)

(副市長) 図書館の災害時の役割が重要だと感じた。それでは、山崎先生より発言をお願いしたい。

(山崎アドバイザー) 最近、統計分析の進歩が著しく、特に認証システムが進化している。例えば、個人情報を持ち離し、特性だけを収集・分析するシステムが開発されている。これにより、「何時にどんな属性の人が来ているか」といったデータがわかるようになり、図書館でもこのシステムを検討してもらえると良いと思う。

次に、居場所作りについてだが、これは非常に難しい課題で、全力で取り組まなければ達成できない。さまざまな年齢層に対応した居場所を提供しなければならないと感じている。子どもから高齢者まで、それぞれに合った空間が求められるが、特に重要なのは「目的なく来られる場所」であるという点だ。図書館のように、何も目的がなくてもふらっと立ち寄れる場所は非常に貴重で、市役所や公園など、こういったオープンな場所は他にほとんどない。図書館のような場所が増えれば、もっと積極的に利用されるようになると思う。また、子どもたちも居場所がなく、特に高校生はどこに行くべきか困っていることが多く、社会的な問題として重要だと思う。さらに、図書館が社会に与える影響として、病院に行く回数が減ることで医療費が削減されるという統計結果もある。病気の予防や健康維持が促進されるからだ。こういったデータを市民にしっかり伝えることが重要だ。居場所作りには「空間ゾーニング」や「音響ゾーニング」などの技術的な課題もある。これについては専門家と議論を重ね、慎重に設計する必要があると考えている。例えば、1人用や4人用の机があったり、窓際の席があったりと、利用者の多様なニーズに対応する空間作りが求められる。神奈川県のある図書館を見学した際、500席の空間があり、個室も10部屋以上あり、ネット予約で利用できるシステムがあった。このシステムにより、高齢者や高校生をはじめとする多くの人々が利用している様子が見られた。こうした事例を参考にし、図書館の役割を広げていくことが重要だと感じている。

(副市長) 居場所には、目的を持って訪れる場所と、目的がなくても自然に行きたくなる場所の2タイプがあると感じている。この両方を両立させることで、図書館はより多くの人々にとって魅力的な場所となり、新たな出会いの可能性も広がるだろう。また、移転に際しては居心地の良い空間作りが重要だと再認識した。

次のテーマは「学びと繋がり」について。この地域は学びを大切にしてきた風土があり、それが図書館にとって大切な特徴だと感じている。このテーマに関する意見をお聞きしたい。

(委員) 繋がり方には様々な形があると感じている。実際にバックヤードを見学した際、二つの感情が交錯した。残念だったのは、バックヤードの蔵書がすべてアナログ管理されていたことだ。本にタグをつけてスキャナーで読み取る方法では、書籍の位置は分かるが、ピンポイントで本を取り出すのが難しいと感じ、効率的なシステムが必要だと感じている。一方で、面白かった点は「古文書」の存在である。古文書は木箱にまとめられ、数十冊の資料が一冊の本の中に収められている。この資源の価値は非常に高いと思う。どう活用し、より多くの人々と繋がるためにどう活用するかを戦略的に考えるべきだと感じる。間口を広げることで、図書館の資産として非常に大きな価値を持つのではないかと。

(委員) 図書館と郷土資料館は関連が深いですが、資料の種類や目的が異なるため、それぞれの役割を平等に考えるべきだ。併設については、効率的な利用が期待できる一方で、運営面で問題が生じやすいため慎重な議論が必要だ。郷土資料館は地域にとどまらず、全国の研究者や大学の図書館と連携し、発信力を強化することが重要である。このような繋がりが地域や事業の発展に貢献する。今後、図書館と郷土資料館のあり方や、併設の是非について具体的に議論を進めていく必要がある。

（副市長）郷土資料や郷土資料館は、鶴岡の大きな特徴であることは共通の認識だと思う。しかし、専門性が高いため、郷土資料を図書館に併設するかどうかは慎重に検討する必要がある。人材の育成や他の施設との連携、研究者支援の観点からも、専門分野に特化した施設を考えることが重要だと思う。これについては、今後さらに検討していきたい。郷土資料を扱っている他の図書館について、山崎先生よりご発言いただきたい。

（山崎アドバイザー）郷土資料や地域資料を扱う図書館は多く存在している。例えば、秋田県立図書館は図書館と公文書館は同居しているが組織が違う。郷土資料、行政資料を扱う公文書館と図書館は同じ場所でカウンターも隣あっているが組織は違う。施設の組織が異なっても共存は可能だが、施設と組織の問題は別に考慮する必要がある。秋田県では郷土資料を専門的に扱うために資料館を別施設として設置し、より丁寧な管理や人材の育成ができ、良い結果を得られた。単純に同居させるのではなく、ユーティリティや利用者の利便性も考慮し、最適な運営体制を検討することが重要であり、研究者だけでなく地域住民の視点も取り入れるべきだと思う。資料館と図書館の運営については、実際の運用面を見ながら議論を進める必要がある。

（副市長）これは非常に重要な検討事項であると感じた。酒井委員が仰ったことは、決してこのテーマだけに限られる話ではなく、繋がりという観点から他のテーマとも密接に関連しているため、大変有意義な意見だと感じた。

（委員）学びと繋がりについて、少し大きな視点から話をしたい。図書館は、市民の財産が集まり、それを共有できる場所として存在している。これが図書館の良さだと思うし、改めてその役割の大切さを感じた。図書館の本来の目的である資料を結びつける役割をもっと充実させるべきで、来館者数を増やすために本来の機能から外れてしまっているといけないという意見には、私も賛同する。図書館をよく利用している人々にとっては、もっと使いやすい場所になってほしい。しかし、まだ利用していない人々に対しては、本や資料を軸にして図書館に興味を持ってもらう仕組みを作ることが非常に大事だと思う。

次に、2点の提案をしたい。

まず、図書館を使っている人々が求めるサービスの充実について。例えば、病気や介護、子育てなどで外出が難しい人たちや、忙しい仕事を持つ人たちにとって、図書館に足を運ぶのは難しい現実がある。そうした人々にも図書館の利用機会を提供するために、電子図書館を導入している事例を紹介したい。例えば、山形県東根市や県立図書館では、電子図書館の取り組みが進んでおり、遠くに住んでいる人たちにも図書館のサービスを届けることができている。実物の本を手にとって読むことが大切だという意見もわかるが、図書館をもっと身近に感じてもらうためには、建物への訪問だけでなく、他の手段で図書館と繋がる仕組みを作るべきだと感じている。例えば、絵本を借りたいけれども、汚れたり破れたりするのが心配で借りるのを躊躇する親たちの意見がある。電子図書館を利用すれば、タブレットで絵本を読めるため、行きたくても行けない人々にもサービスを提供できるのではないかなと思う。

もう1点、図書館に保管されている多くの本が利用されていないことに驚いた。これは非常にもったいないと感じている。例えば、「町中図書館」や空き家を活用するアイデアは非常に良いと思った。図書館と商店街、空店舗をうまく活用して本に触れる機会を提供する取り組みもある。現在、空き家が問題になっている中で、そのような空き家を活用して、例えば集落の公民館などに図書館の返却場所や保管場所を設けることができるのではないかなと思う。市民サポーターを養成し、地域の人々が管理運営に携わることで、より身近な場所で本と触れ合える機会を作り、その結果として、大きな図書館への関心を高める仕組みが作れるのではないかな。

図書館の役割や利用方法をもっと広げて、多くの人々にとって身近で便利な場所にしていくための議論を深めていきたいと思う。

(副市長) 図書館の本館については、資料や本の充実が重要だと思う。しかし、「アウトリーチ」という言葉があるように、実際に来館できないけれど活用したいという人々にどうやってサービスを届けるかが重要だ。図書館だけが図書館である必要はなく、空き家や公民館を活用して、町の中でより身近な形で図書館機能を提供していくことも大切だというご意見を頂いた。

(委員) 資料館には非常に価値のある宝物が多く、市民にもその資料を積極的に活用してほしいと感じている。アートフォーラムの近くに図書館があれば理想的だという点には私も同感だ。山崎先生が指摘したように、図書館と資料館が離れていて不便だという問題も、やはり文化施設が集まる場所に図書館と資料館が一緒にあれば、より利便性が高まると思う。

また、大学院が公立化されることになり、その移転先や周辺の利便性についても懸念がある。大学院をキャンパス内に移設し、隣接する施設に図書館や資料館を設けることで、学生や地域住民にとって利便性が高まり、より多くの人々に利用されるようになるのではないかと考えている。

さらに、藤沢周平記念館についても触れたい。ここは非常にレベルの高い文化が集まる場所で、古文書も多く、優れた人々を多く輩出してきた地域だ。この藤沢周平記念館と郷土資料館が一体化することで、より充実した施設になるのではないかと考えている。

最後に、今後すべての資料がデータベース化される流れが進む中で、手に取って本を読むこととパソコンでデジタル資料を見ることには感覚的な違いがある。そのバランスをどう取るかが今後の課題だと考えている。新たに施設をすべて建設するのは難しいかもしれないが、どのように取り組むかを考えていく必要がある。

(山崎アドバイザー) 電子書籍は、コロナ禍で便利になった一方、実物が残らないという問題もある。例えば、契約終了後に本が消失してしまうため、所蔵にはならない問題がある。しかし、子供が熱を出した夜など、図書館が閉まっても自宅で本を読める点は大きな利点だ。電子書籍は完全に排除せず、状況に応じて導入するべきだと思う。また、北広島市のように、小学校の副読本を電子書籍を作り教育資産とする事例もある。電子書籍はメリット、デメリットがあるのでハイブリッドで考えるといい。

郷土資料の問題も難しい。鶴岡市は多くの資料があり、独立館として運営することも可能だが、古い施設の維持管理にはコストを要する。歴史史料と図書館資料の扱いやその中間的な存在をどう扱うかも問題だし、専門性をどう維持するかは大きな課題である。資料を一緒に扱うことの利便性もあるが、保存方法や費用面での配慮が必要。デジタルアーカイブの活用で、全国どこからでもアクセスできる資料提供が可能になるかもしれない。方法論よりも目的を明確にし、市民に最も有益な方法を議論することが重要だと感じている。

(副市長) 「ハイブリッドで考える」という視点が示され、各委員の意見を通じて、学びと地域の繋がりについて再認識した。図書館だけでなく、郷土資料館や文化施設、地域の空き家など、さまざまな施設間で繋がりを作ることが大切だと改めて感じた。

次に、「地域を発信する」ことに関連して、郷土資料の保存と活用について意見を求めたい。鶴岡市の郷土資料館は図書館と併設され、地域資料を受け入れ、保存・整理が進められている。これは市の特徴的な取り組みであり、皆さんの意見を伺いたい。

(委員) 郷土資料館についてだが、資料の収蔵状況を見て、資料が溢れて整理が進んでいない現状に困っていると感じた。今、特に解決すべき課題は2つだと思う。

1つ目は、分散して保管されている資料を一元化すべきだということだ。現在、資料が旧校舎などに置かれている状態で、整理が進まないのが問題だと思う。資料を整理するための場所やスペースを早急に確保する必要がある。

2つ目は、専門職員の不足。資料館には非常に有能な職員がいるが、相談機能を維持するためには、さらに専門知識を持った職員を増やす必要がある。専門職員が増えれば、資料館の利用者が増えて、地域社会にも大きな利益があると思う。

さらに、デジタル化やアーカイブの発信も課題だと思う。資料館を多くの人に利用してもらうためには、展示事業が鍵になる。常設展示があれば、より多くの人々が郷土資料に触れる機会が増えるし、展示物の販売なども一つのアイデアだ。また、企画展示の内容を展示後にも見られるようにするために、解説書や図版を作成してインターネットで公開することが重要だ。これにより、発信力が高まり、郷土資料をより多くの人に知ってもらえると思う。

（委員）（前に発言した委員）の意見には本当に共感している。鶴岡市で実現してほしいと感じていたことが進んでいて、とても嬉しく思っている。例えば、武生では、紫式部公園を中心に源氏物語に関連する施設がつながっていて、文化施設がまちづくりに貢献していることを実感した。歩いていくと、文化施設が連携している様子が見られ、途中には源氏物語をテーマにした道や庭園もあり、非常に印象的だった。鶴岡でも、このように文化施設をつなげることで、まちの魅力を引き出せるのではないかと思った。場所の問題はあるが、文化施設同士をつなぐ動線を作ること、観光客だけでなく、市民も気軽に訪れたい場所にとできると思う。レンタサイクルを使って移動しながら、武生の施設を巡ってきたが、そのような交通手段があれば、さらに便利ではないか。文化施設同士が協力し合い、単独で頑張るのではなく、連携して「ここもある、あそこもある」と紹介し合うような仕掛けがあれば、もっと多くの人々が訪れ、地域の魅力が高まると思う。最近、シンポジウムでパネリストとして参加した際に、施設同士の連携が足りないという問題が指摘されたが、鶴岡の施設がもっと協力して、「ここを見に行こう」と思わせるような仕掛けを作りたいと思っている。

（副市長）本日得られたキーワードは次の5つにまとめられると考える。

①子供の視点

すべてのテーマに共通する重要なポイントだ。子供たちの視点を大切にしながら、さまざまな取り組みを進めるべきだと思う。

②居場所

情報を得る場所だけでなく、あらゆる世代が集まり、生活における「余白」として機能する場所が必要だと感じた。自由に交流できる空間の重要性も感じた。

③出あい、きっかけ、つながり

交流の場を作り、新たなつながりが生まれることが重要だ。学校や地域、施設間の連携を強化することで、広がりのあるコミュニティが作られると思う。

④学び

学びは子供だけでなく、大人や現役世代にも必要だ。生涯学び続ける重要性を考え、図書館の整備を進めるべきだと思う。

⑤郷土資料

鶴岡市の特徴である郷土資料の保存・展示・発信は非常に重要だ。地域にとって価値ある活動だと考えているので、大切にし、積極的に発信していくべきだ。

これらのキーワード（子供、居場所、出会い、学び、郷土資料）を今後の基本理念や方針に活用していくことが大事だと思う。これを踏まえて、今後の取り組みを進めていきたい。

（市長）市役所の様々な部門が関与する中で、行政として図書館を生かす視点が薄かったと反省している。長い歴史のある図書館なので、コアな利用者がある一方、私たち行政は自分の仕事に追われて図書館を生かすところに至らなかったのは反省したい。図書館を整備する以前からやれることをやっていかなければと思っている。図書館は中心市街地に位置付けられると思うし、東北でいちばん広いという特性もある。地域や分野が多岐にわたるなか、本館の役割はプラットフォームとしても大きい。行政が図書館を生かすというとは本館だけではなく、「タクト」や「にこふる」、「アートフォーラム」など他の文化施設、

公共施設との連携も必要。協働の視点も地域別、分野別のパートナーシップを含めどう構築していくかが大事。

まだこれからの議論もあると思うが私はここをリノベーションして郷土資料をちゃんと保管して見ていただくことはやったほうがいいと思う。図書館と郷土資料館の組織は手薄で属人的に頑張っていた部分もあり、組織としてどういう整理がいいのか考える必要がある。

具体的な場所は基本計画にゆずるが、ぜひ今日の議論をもとにさらに進めていただければと思う。

鶴岡は歴史資源あり、文化を大切にしていると山崎先生からおほめの言葉をいただいた。今、古い家は跡継ぎがいなくなって史料が散逸する危機がある。いろんなところで保存されているものを生かすのが当然でその企画力が問われる。展示の話もあったが、歴史ツーリズムとか、「読書のまちづくり」の核となる図書館整備にあわせて企画立案力が各部で問われてくる。そこはしっかり受けていきたい。

(山崎)：市民の声を聴くことは、この市は非常に丁寧に取り組んでいるというのが個人的な印象。そこは褒めたい。今の民主主義は効率性よりはステップを大事にしなければいけないのでこのやり方でこれからも進めてほしい。もう一つ、方向性が何点か示されたが、私は妥当なまとめで抜けているものはないという印象。皆さんも同じ思いかと思う。これを具体化していく議論が必用だが、方向性の柱はこの5点でよろしいかと思う。

11月に横浜市で行われた「図書館総合展」では私自身二つのセミナーを主催し、いろんな方とお会いし、関連企業ブースを見たが、デジタルの世界が進んできたことを実感した。今後はこれまでできなかったサービスが実現できると思う。人手が足りなくて出来なかったサービスが効率化を進める、あるいはICTの力を借りることで司書の方も時間が生まれる。対人的なサービスはいくらAIがあっても絶対に大事。単純にAIとかのシステムを入れて人が余ってきたらその人を省くのではなく、むしろ属人的に必要なサービス、そちらに充てていかなければいけない。相談はAIではまだまだ不十分でリアルが絶対にいい。相手にあわせて寄り添っていくところをもっと重視していかないといけない。これが進むと図書館に対する社会的な認識が変わっていくだろう。

新しいことをどんどんやっていくことも大事だが、今までやってきた守らなければいけないこともある。図書館は資料をしっかりと集めて提供していく。古いものも新しいものも必要。そこはなおざりにはできない。これを踏まえてまさしく新しいことに私たちは挑戦しなければいけないのだろう。鶴岡市は東北一広いので、本館ができたとしても離れている人はメリットが少ないとならないようにリアルもICTも含めて考えないといけない。すべてお金がかかるので100%はできないが、重要な点だと改めて思う。

(市長)：図書館ではレファレンスのサービスの充実、郷土資料館では専門家の増員や大学や博物館との連携という話もあった。スタッフの仕事の効率はICTなどを活用して上げていかなければいけないが、蓄積をして質的な向上を図っていく仕組みが必用だと思っている。内部的にはしっかりやっていかなければいけないと思っているので、改めて申し添えさせてもらう。